

気を付けて
子どもの肥満



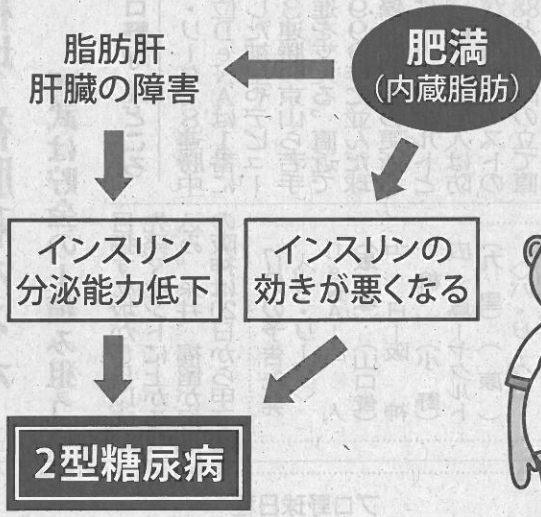
小谷 裕美子
徳島大学病院
小児科医師

糖尿病は、大きく二つに分けられる。インスリンの分泌が欠乏している1型糖尿病と、過食や運動不足からインスリンの効きが弱くなるなどとして起こる2型糖尿病。近年は、高度肥満による2型糖尿病の子どもが増加傾向にある。

2型糖尿病患者の多くは肥満を伴っていて、肥満度が上がるほど発症の確率は高まる。皮下脂肪より内臓脂肪が多い肥満の場合、インスリンの効きが悪くなる。腹囲が身長を半分以上になり、内臓脂肪が過剰に蓄積されると、糖尿病、高脂血症や高血圧などを併発しやすい。

多くは自覚症状がないため、学校の健診をきっかけに発覚する例が少な

2型糖尿病が増加傾向



くない。尿検査で尿糖の陽性が見られ、血液などを調べる再検査の結果、糖尿病と診断される。特に、小学校高学年以降に表面化するケースが多い。思春期は、性ホルモンの影響でインスリンの効きが弱まることもあり、肥満や生活習慣の乱れには注意が必要だ。治療は大人と同じように、食事や運動への配慮が基本となる。成長曲線から身長がどれくらい伸びるかを予測し、成長に合わせて体重増加を緩やかにしていく。飲み薬やインスリン注射を併用して、血糖コントロールを行う場合もある。

食事や運動へ配慮を

肥満だけでなく、母親の痩せ過ぎは子どもの糖尿病のリスクを高める。痩せた母親からは、2500g未満の低出生体重児が生まれやすい。低栄養の新生児は、インスリンを出す機能が低下するなどし、2型糖尿病のリスクが高まるといわれている。

を怠ると、動脈硬化が早く進み、狭心症や心筋梗塞などの病気を招く。子どもの頃から高血糖が続くと、30代や40代に命に関わる問題が起こる恐れがある。糖尿病が疑われたら、必ず再検査を受けて通院治療を続けよう。(橋本真味)

×モ